

曲目解説

ドヴォルザーク：2つのワルツ op.54

原曲はピアノのための「8つのワルツ」。今回は、弦楽五重奏用に編曲されたイ長調（第1番）と、ニ短調（第7番）が演奏される。前者は、ゆったりとした優美なテーマが、中間部のテンポを速めた憂いあるメロディを挟むように奏でられる。後者の構成も似ており、まず物憂げなテーマがアレグロで現れ、中間部で耽美な調べに引き継がれる。いずれも希代のメロディメーカー、ドヴォルザークの面目躍如たる小品である。

ドヴォルザーク：弦楽五重奏曲 第2番 ト長調 op.77

2本のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスのために1875年に作曲が始まり、翌年、プラハで初演。当初、全5楽章の作品として構想されたが、「間奏曲」と題された第2楽章が削除され、現在の4楽章構成となった（もともとの間奏曲は弦楽四重奏曲第4番の緩徐楽章を改作したもので、最終的には「弦楽のためのノットウルノ op.40」として出版された）。

第1楽章「アレグロ・コン・フォーコ」はソナタ形式。短い序奏を経て、快活な第1主題が奏でられた後、チェロが雄渾な第2主題を歌う。第2楽章は「スケルツォ、アレグロ・ヴィヴァーチェ」。切れ味鋭いリズムミクナテーマとトリオの哀感あふれるメロディの対比は、のちの「スラヴ舞曲集」での成功を予感させる。第3楽章「ポコ・アンダンテ」は、じわじわと感傷を染み込ませるようなドヴォルザークならではの音楽。ところどころで騒めきを見せながらも、音楽は深い哀調を帯びていく。第4楽章は Rond 形式の「アレグロ・アッサイ」。たった2つの短いテーマを出し入れしながらクライマックスを築く。

R.シュトラウス：歌劇《カプリッチョ》前奏

歌劇《ばらの騎士》がモーツァルトの歌劇《フィガロの結婚》の翻案であるように、このR.シュトラウス最後のオペラは、サリエリの歌劇《まずは音楽、それから言葉》のパロディ。台本は名指揮者クレメンス・クラウスとの共作。オペラの冒頭、舞台上で演奏されるこの弦楽六重奏曲は単独で取り上げられることも多い。ウィーン情緒たっぷりの優美なメロディのなかに時折、不穏な調べが顔をのぞかせ、劇の騒動を予感させる。

R.シュトラウス：メタモルフォーゼン

1945年に作曲された「23の独奏弦楽器のための習作」という副題を持つ作品。今回はルドルフ・レオポルトが編曲した弦楽七重奏版でお届けする。

「メタモルフォーゼン」とは、ドイツ語の「メタモルフォーゼ（変容）」の複数形で、通常の変奏曲とは異なる書法で作られた楽曲の内容を表すと同時に、戦禍によって荒廃していく自国に対する悲痛な想いが込められている。

音楽はベートーヴェンの《英雄》交響曲の第2楽章「葬送行進曲」冒頭の4小節を動機として始まり、急・緩・急の3つの部分から構成される。アンダンテの第1部は自作の《ツァラトゥストラはかく語りき》や《ナクソス島のアリアドネ》、またワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》などの断片を織り込みながら進み、エロイカの動機がワーグナーの無限旋律を拡大したかのように“変容”していく。第2部のアジタートで音楽はあっそう激しく痛切さを増す。第3部のアンダンテに入ると、楽想は絶望から諦念へとさらに“変容”し、「思い出のために」という表示に促されるように静かに終結を迎える。

初演は、パウル・ザッハーの指揮、コレギウム・ムジクム・チューリヒの演奏により、1946年1月に行なわれた。